

外国為替レートにおける季節性

立正大学大学院生 歌代 哲也

本研究では、外国為替市場における季節性アノマリーが存在するかどうかについて検証を行った。1986年1月から2011年12月までの25年間を対象として、主要通貨の1週間の平均を用いて各月の転換点を大小に関して、①平均的な分散と比較して優位性を示すか否か、②各相場間における共通性および差異性、について調査を行った。先行研究である曜日効果の検証では、主として日次レベルという比較的短期の影響を取り扱うものであるが、本研究では、半年から1年程度の期間における影響について検証を行った。なお、先行研究では、アノマリーそのものの検証、およびその持続性の検証が主要な検証方法とされているが、本研究では前者を目的としている。

本研究により、いくつかの外国為替市場においては、季節性が確認されたことにより、外国為替市場においても、相場の転換点はランダムではない可能性が示唆される。各通貨間における傾向は、必ずしも一貫したものではなく、取引される通貨によって差異があることが確認された。具体的には、季節性については日本円、英ポンドの外国為替市場では、それぞれのクロス相場において一定の相関性がみられるが、米ドルおよびユーロではクロスで見た場合にも相関性が低かった。

この結果に対する理由としては、以下の仮説を提示した。日本円において顕著な傾向であった1月と4月に多くの転換数が検証されたことから、新年および新年度という社会慣行からの影響、および、間接的には、社会慣行から発する人間行動による影響、第2に、外国為替相場における占有率の大小が、季節性を希薄化、増幅する可能性である。